

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 2 月 03 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・特定研究員
氏名	澤田晶子

<p>1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域)</p> <p>鹿児島県熊毛郡屋久島町</p>
<p>2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験)</p> <p>屋久島学ソサエティ第2回大会参加・発表およびニホンザル調査</p>
<p>3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)</p> <p>平成 26 年 12 月 12 日 ～ 平成 26 年 12 月 19 日 (8 日間)</p>
<p>4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)</p> <p>湯本貴和教授(京都大学霊長類研究所)、手塚賢至氏(屋久島学ソサエティ大会事務局)</p>
<p>5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果:長さ自由)</p> <p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>今回の渡航における目的は、屋久島学ソサエティ第2回大会への参加・発表であった。また、学会参加後も屋久島に滞在し、腸内細菌叢解析のため野生ニホンザルの調査をおこなった。</p> <p>■日程■</p> <p>2014/12/12 屋久島入り、屋久島学ソサエティ大会事前打ち合わせ</p> <p>2014/12/13 屋久島学ソサエティ第2回大会参加・発表 <テーマセッション1:山のトイレを科学する></p> <p>2014/12/14 「ヤクタネゴヨウの森づくり植樹祭」参加 屋久島学ソサエティ第2回大会参加・発表 <テーマセッション2:屋久杉のすべて></p> <p>2014/12/15 ニホンザル調査(上部域)</p> <p>2014/12/16 悪天候のため調査なし</p> <p>2014/12/17 ニホンザル調査(西部林道)</p> <p>2014/12/18 ニホンザル調査(西部林道)</p> <p>2014/12/19 ニホンザル調査(西部林道)、帰所</p> <p>屋久島学ソサエティは、“屋久島の「知のプラットフォーム」として、研究者は最新の研究成果をわかりやすく島の住民に伝え、また島の住民は島に住んでいないとわからない実情や実感を島外の研究者に伝えることでお互いに学びあうこと、細分化された学問分野と島の現実を横断的に結んで真の問題解決のために必要な知識を共有し、実践につなぐこと(同学会ウェブサイトより)”を目的に設立された学会である。島民と研究者が双方向に情報を発信・共有する貴重な場として、島内外から多くの参加者が集う。安房の屋久島町総合センターで開催された今大会は、前回に比べると、家族連れ・子供連れの参加が少ない印象を受けた。前は第1回大会ということで、様子をみにきた島民が多かったということかもしれないが、もっと気軽に立ち寄ってもらえる場として認識されるためにも、体験コーナーやクイズなど、子供たちが遊びながら学ぶことのできる展示があればいいのかもしれない。</p> <p>1日目は「山のトイレを科学する」、2日目は「屋久杉のすべて」というタイトルでテーマセッションがおこなわれた。とりわけ山のトイレに関する話が興味深く、屋久島における山のトイレ事情や、国内外での成功例について知ることができた。携帯トイレの普及率はここ数年間で伸びており、屋久島においても、土産屋などさまざまな店で購入できるようになった。しかし、携帯トイレを正しく利用するにはコツが必要であり時間もかかること、使用済みの袋を各自が持ち帰る必要があることなど、使用者側の負担が大きい。あくまで携帯トイレは当座をしのぐための手段であり、1日も早い常設トイレの導入が望まれるというのが屋久島ガイドの総意であるようだ。しかし、富士山などトイレの導入に成功している地域がある一方で、屋久島では未だ問題が山積みのようなのである。一例として、新高塚小屋の自己処理型トイレ(TSS式トイレ)が紹介された。2011年7月、環境省が1億円もの予算を投じて設置したこのトイレは、2013年7月には使用不可となり、現時点でも閉鎖されているようだ。利用者数が予測をはるかに上回ったことで、トイレの処理能力が追い付かなくなったためという説明があったが、実際の利用者数は調べたデータは存在</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

しないという。山のトイレは導入すればそれで終了というものではなく、そこから維持管理していく必要がある。だれ（環境省・屋久島町役場・他の団体）がその役割を担うのかという問題は、どこから費用を捻出するのかという大きな問題に直結する。多くの観光客が訪れる屋久島において、山のトイレ問題は早急に解決されるべき問題であると改めて感じた。



屋久島学ソサエティ第2回大会



PWSハウス屋久島の概観

大会2日目の午前中には、屋久杉自然館園内で開催された「ヤクタネゴヨウの森づくり植樹祭」に参加した。ヤクタネゴヨウは、屋久島と種子島にのみ自生する絶滅危惧種で、名前のとおり「五葉」の松である。参加者は、ひとり1本ずつヤクタネゴヨウの苗を受け取り植樹した。それぞれの苗には個体番号を記したプレートが付けられており、定着具合を見守ることができる。今後屋久島を訪れる際に、自分自身の目でも確認していきたい。島内に家がある場合、里親として苗を持ち帰り自宅の庭に植えることもできるという試みはおもしろいと思った。植樹祭後は、屋久杉自然館を見学した。



植樹祭の風景



ヤクタネゴヨウの苗



苗には個体番号が付けられている

今回の屋久島滞在中、PWSハウス屋久島に宿泊した。報告者たちが最初の利用者ということで光栄な限りである。シャワーのお湯が出なくなるというトラブルはあったものの、まだ木の香りが残る建物内は非常に快適であり、ひさびさの2段ベッドはワクワクした。なにより、トイレとシャワーが3つつあるのありがたい。これまでの屋久島実習では、ひとつしかないお風呂を男女20数名でいかに効率よくまわすかという問題に悩まされてきた。PWSハウス屋久島ができたことでこの問題が解決するかと思うと、次の実習がとても楽しみである。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

学会終了翌日から、牛田一成先生（京都市立大・農学）と共にニホンザルの調査を実施した。目的は、腸内細菌叢解析のための糞サンプリングである。15日は、半谷吾郎先生（京都大・霊長研）が上部域のカメラトラップを回収しに向かわれるということで、同行させていただいた。12月上旬から中旬にかけて、強力な寒波が列島各地を襲来したが、屋久島も例にもれず、上部域には積雪がみられた。非常に寒い中、凍った斜面を登るのは骨が折れたが、雪の中の屋久島を歩くという貴重な経験をすることができた。上部域では、いくつかニホンザルの糞を採取することができた。持ち帰ったサンプルは、現在牛田先生が解析されている。



屋久島上部域（標高約 1,000M）からの眺め

雪上に残るコイタチの足跡（上部域）

16日、爆弾低気圧による暴風雨のため調査は休みになった。町内放送用のスピーカーからは、屋久島発着のフェリーや高速船が欠航になったことを知らせる放送が次々と流れてきた。宮之浦岳あたりは大雪が降ったようで、凍結・積雪のため登山口へと続く道路が通行止めになったとのこと。幸いにも翌日には雨が止み、調査を再開することができた。しかし、強風のため海路が閉ざされてしまい、結局 18日までフェリーも高速船も欠航した。集落内の商店の店頭から、日を追うごとに生鮮食品が消えていくのを目の当たりにし、屋久島にとって船便がいかに大切な存在であるのか痛感した。

17日以降は、西部林道（海岸域）でサルを追いかけて糞のサンプリングをおこなった。腸内細菌のうち、嫌気性菌は大気に触れると死滅するため、腸内細菌叢解析にはできるだけ新鮮な糞サンプルが必要となる。西部林道のニホンザルは人馴れしているため、排泄直後の糞という理想的なサンプルを集めることができた。今回、牛田先生に同行させていただき、多くのことを学んだ。たとえば、炭酸ガスが充填された「ケンキポーターII」という容器に糞を入れると、好気性・嫌気性菌を適切に保存して持ち帰ることができる。臨床医学では広く用いられているそうだが、野生動物の研究においても活用することができると思う。その他にも、サンプリングにおける様々なチップや工夫を学ぶことができた。ぜひ今後の屋久島実習でも実践してみたいと思う。

観察期間中、西部林道サルたちはアコウやオオイタビといったイチジク属の果実を採食していた。報告者が長期調査を実施していた年（2009-2010）は、食物環境が悪くなる冬期に fallback food であるアコウを食べることはあっても、オオイタビを食べる姿を観察することはほとんどなかった。2014年の秋に屋久島実習で西部林道を訪れた際、近年稀にみるほどオオイタビが豊富であることに驚いたが、サルたちは未だにその恩恵を受けているのかもしれない。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



アコウ（イチジク属）の果実を食べる



サクラツツジの花を頬袋に詰め込む



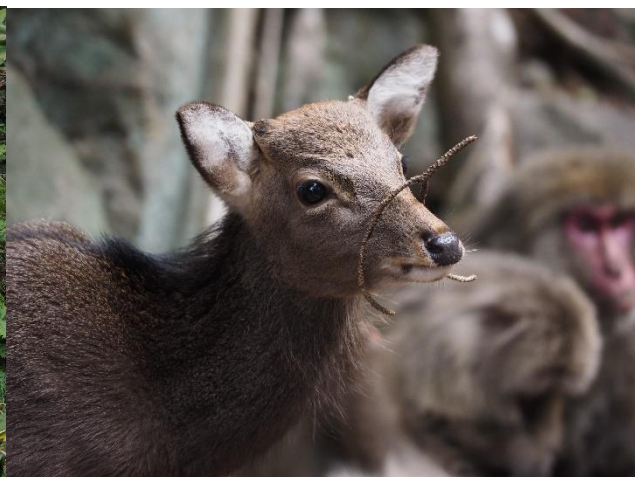
身を寄せ合いサルダンゴをつくる



日本列島を襲った寒波の影響は屋久島にも



シカの背中に乗るサル



枝に顔が挟まっても動じないシカ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



サルの糞をサンプリングする

好気性・嫌気性細菌のバランスを崩さないよう炭素ガスが充満したチューブに入れて持ち帰る

6. その他 (特記事項など)